

意見

甚野 尚志

さて、中世思想研究は、いかなるかたちで現代の政治・国家の問題に応用可能なのか？——この問いは率直にいて、私自身これまで十分に考える機会をもたなかったもので、きわめて新鮮に、しかも重々しく感じられるものだ。これにかんしてざっと考えてみると、おそらくふたつのことなる方向性があるのではないだろうか。

ひとつは中世の政治思想のなかに、現代の国家や社会の理論にも適用可能な理論装置をみいだそうとする立場。それは稲垣氏や清水氏が述べた立場でもある。すなわち、トマス・アクィナスの政治社会論——共通善＝徳の実現を全構成員が志向するような政治思想を、部分的にてあれ現代の国家論のなかに再生させるような方向性。あるいは、中世キリスト教思想のなかに近代的個人主義を補完する共同性、公共性の理念をみようとする議論である。ただし、中世の政治理論の再生・再評価への過大な思い入れは禁物である。倒錯した反近代のユートピア思想を誘発する可能性もあり、この種の議論には、周到で緻密な理論構築が不可欠の前提となろう。

そもそも歴史研究に関心がある私としては、むしろもうひとつの立場を示唆しておきたい。それは、西欧中世の国家や王権を、そのイデオロギーやシンボルを含めた歴史の実体として具体的に分析することから、豊饒で刺激あふれる社会学的な分析視角を手に入れていこうとする立場である。具体的な例をひとつだけあげよう。たとえば、西欧中世の王権儀礼の分析が、人類学者の未開社会の儀礼と社会構造の研究に方法的に多大な影響を及ぼしたような例。このように、分析のモデルとして中世社会をとらえれば、中世の政治思想の分析も、現代国家の深層にひそむ「中世的」な側面を照射するものとして、その応用価値が高まろうというものだ。

じっさいメディアの情報・宣伝により動かされる我々自身の生活が、自由で主体的な個人の政治行動を前提とする近代社会のタテマエとはかなり乖離している、と感じている人も多いのではなかろうか。とくに現代日本において政治行動を規定しているものは、政治家のカリスマ性、民衆の情動や思いこみなど、合理的なものをさして計れない部分が多い。中世研究がもたらす分析のモデルは、我々が考える以上に、現代政治世界の考察に有効であるように思われる。